

## 座談会

(1) テーマ：「与中美日関係」

報告者：帰泳濤 氏（北京大学国際関係学院）

(2) テーマ：“Patriotism, Nationalism, and China’s U.S. Policy:

Structure and Consequences of Chinese National Identity”

報告者：Peter Hays Gries 氏（オクラホマ大学米中関係研究所）

討論者：国分良成（慶應義塾大学）

日 時：2009年12月7日(月) 18:30～20:30

場 所：慶應義塾大学三田キャンパス大学院校舎8階 東アジア研究所共同研究室1

言 語：中国語

報告要旨：帰泳濤氏は、G2が米中関係にもたらす影響について報告を行った。帰氏はまず、アメリカの唱えるG2の議論を整理し、その背景として、米中両国が経済的に深く相互依存するようになった状況を指摘した。また、「G2論」の根底には、アメリカが中国とともに全世界の経済の主導権を握り、中国により多くの責任を負担させるという発想、および、米中両国が協力して世界的な問題を解決するという発想があることを示した。さらに、「G2論」がアメリカのオフィシャルな政策上の主張とはなっていない点を指摘した上で、G2に対する中国政府や中国国内の学术界、メディア界の反応を紹介した。帰氏の整理によれば中国政府は「G2論」を否定しており、学术界やメディア界にはさまざまな反応があるものの、比較的冷静にアメリカの思惑を分析するものも多い。全体として中国はアメリカ以外の国も重要と認めており、この議論が中国の対外政策に影響を及ぼすことにはならないだろうと結論づけた。

G2の登場が日中関係にどのような影響を及ぼすかという質問に対して帰氏は、中国は現在も日本を重視しており、日中関係がG2によって損なわれることはないと回答した。また討論者からは、中国が大国として自信を持つことは日中関係に対してむしろよい影響を及ぼすだろうというコメントが寄せられた。

続いてPeter Hays Gries氏は、2009年の春と夏に中国とアメリカでそれぞれ行われた中国人の意識調査を計量的に分析し、中国のナショナル・アイデンティティの構造と影響について考察した。Gries氏によれば中国のパトリオティズム（愛国主義）は穏和な国際主義と結びつくものであるのに対し、ナショナリズム（民族主義）は他者への敵意に満ちた盲目的な傾向を強く示すものであり、両者は区別する必要がある。さらに前者は中国の対アメリカ政策に影響を及ぼさないが、後者はその反対であるとの見方を示した。

フロアからは、中国においてはパトリオティズムとナショナリズムを分ける考え方は馴染みの薄いものであり、海外の研究者が欧米の概念を用いて中国をこのように分析することにはどこまで意義があるのかという質問がなされた。また、中国のナショナリズムはとりわけアメリカとの関係において台湾を問題としており、それが対米政策に影響を及ぼすのは当然のことではないのかという指摘がなされた。これに対し、Gries氏は、その問題を

認識してはいるが、他方、パトリオティズムとナショナリズムが中国の対外関係にもたらす影響を数量的に示す試みはこれまでほとんど存在せず、今回の調査は、中国人自身が日頃は意識しない問題を意識させうるという点で意義のあるものだと回答した。